

# 価値と価値観に関する考察

～美術科の鑑賞と特別の教科 道徳における取組～

足立 直之

Reflections on Value and Values: Practice of Appreciation in Fine Arts and Special Subject Morals

ADACHI Naoyuki

(Received December 15, 2022)

キーワード：美術科（鑑賞）、特別の教科 道徳、価値の妥当性と問題性、価値観の中心と輪郭

## はじめに

美術科も特別の教科 道徳も豊かな心を育む教科と言われる。ここ近年、学校現場において美術と道徳について指導助言をする機会があり、学びの深まりに共通点があるように感じてきた。美術科も特別の教科 道徳も価値を扱う教科であること、またその価値とどのように向き合い、自分の価値観と照らし合わせることが、子どもたちの学びにとってどれだけ重要かを考えるようになった。

平成27年3月に小学校及び中学校の学習指導要領が改正され、新たに「特別の教科 道徳」（以下、道徳科と示す）となった。学校における道徳教育については、これまでも「道徳の時間を要として教育活動全体を通じて行うもの」として示され、各教科等との関連性も謳われてきた。中学校学習指導要領美術科編では、「創造する喜びを味わうようにすることは、美しいものや崇高なものを尊重する心につながるものである。また、美術の創造による豊かな情操は、道徳性の基盤を培うものである。」<sup>1)</sup>と示されている。さらに「美術科で扱った内容や教材の中で適切なものを、道徳科に活用することが効果的な場合もある。また、道徳科で取り上げたことに関係のある内容や教材を美術科で扱う場合には、道徳科における指導の成果を生かすように工夫することも考えられる。」<sup>2)</sup>の表記もある。ここでは、美術科と道徳科における資質や能力、内容に関する共通点が示されているが、自身が述べたいことは、学びの過程についての共通点と相違点のことである。『価値の追求』にこそ学びがあり、その結果として感覚や能力として身につけていく自己の価値観の形成について述べたいのである。

## 1. 価値を扱う美術科と道徳科の共通点と相違点

ここでは「価値」と「価値観」について整理したい。国語辞典によれば価値は「その事物がどのくらい役に立つかの度合い。値打ち。経済学で、商品が持つ交換価値の本質とされるもの。哲学で、あらゆる個人・社会を通じて常に承認されるべき絶対性をもった性質。真・善・美など。」<sup>3)</sup>とあり、価値観は「人が自分を含めた世界や、その中の万物に対してもつ評価の根本的態度、見方。」<sup>4)</sup>と示されている。絶対的、本質的な性格をもつ「価値」と個人的な側面をもつ「価値観」で区別することができる。

### 1-1 価値と価値観

ここで、道徳科における「価値」「価値観」について、東北学院大学の紺野祐、環太平洋大学の盛下真優子は『道徳教育における「価値」と「価値観」について』<sup>5)</sup>の中で次のように述べている。

道徳的な「価値 (value)」は多様であるが、しかしそれらは人びとによって客観的なものとして、つまりは普遍性や絶対性をもつものとして認知され、受容されうる。そのいっぽうで、「価値観 (values, view of values)」は、道徳的価値を含む多様な諸価値の間に優先順位を付け、ものごとの評価基準となり、行

為や生き方の指針として機能しうる。価値観はたしかに、人びとのそれぞれにおいて主観的で相対的なものでしかないかもしれないが、だからといってそれらの多様な価値観に序列を付けたり単一の価値観に統一したりすることもできない。

美術においても同様の捉え方ができよう。作品としての価値は、普遍的、絶対的なものであるのに対して、価値と向き合った際の価値観は個人的であり主観的なものである。美術における美術文化への理解や伝統の継承という伝達可能な価値と個人的、主観的な価値観は、美術を受け止める際に必ずと言ってよいほど差が生じる。そのように考えると、道徳科も美術科もいわゆる「問い」によって学びの深まりが左右される。「問い」により見方や考え方は方向付けされ、はたらく思考も変わってくるということである。思考を基に感じ方も変わってくるため、教師の指導は美術科においても道徳科においても重要と言えよう。

## 1-2 美的価値と道徳的価値の特性

美術における価値は、評論家等によって明確に示されている。それに対し、道徳的価値は項目としては明確に示されている。

美的価値は明確に価値づけられた文化的価値、作品的価値もある反面、その価値に対して理解が不十分であったり、価値として誰もが受け入れることができなかつたりするという問題がある。文化的な価値は理解できたとしても個人的に共感できるかどうかは別問題ということである。具体的に、中学校の教科書を見ると多くの作品が掲載されている。ここではレオナルド・ダ・ヴィンチとピカソを例に挙げる。レオナルド・ダ・ヴィンチについてはルネサンスを代表する作家として取り上げられており、扱う作品やページ数は異なる。文化財の修復という点から取り上げている教科書もある。また、ピカソは戦争の悲しさをテーマとした『ゲルニカ』をどの教科書も取り上げている。多様な表現の追求をする作家として扱っている教科書もある。詳細は、以下の表1、2に示したとおりであるが、教科書によって差がある。いずれも作家としての生き方や表現の追求と作品としての価値についての標記が見られる。しかしながら、ピカソを教科書で取り上げたからといってピカソの作品や作家としての価値に理解があるかというところはならない。そこには「価値観」の違いが大きく影響すると考えるが、このことについては次の項で述べる。

また、ダ・ヴィンチやピカソ以外の作品については、千差万別である。作品の主題や表現方法によって作家や作品自体が大きく異なるので、ここでは割愛するが、同じ作品や作家を取り上げたとしても文化的価値を紹介する上で、編集者の意図によって大きく異なることが特徴といえる。

それに対して、道徳的価値として学習指導要領に「思いやり」や「向上心」など内容項目が示されており、明確である。殊に、道徳的価値については、高宮正貴は著書『価値観を広げる道徳授業づくり』の中で、学習指導要領に示されている目標のうち、道徳的諸価値の理解に基づき、自我関与を促すことや多面的・多角的に考えることについてふれている。あくまでも道徳的諸価値がある程度の周知の事実であるからこそ、改めて問い直す必要があることも示している。言い換えれば道徳的価値は社会通念的に常識的・日常的であり、認識が異なることが少ない。

このように美術における価値は歴史的価値や作家としての取組、表現様式や内容などが異なるため、理解されにくい面があるのに対し、道徳的価値については明確に示されている一方で、その境界が曖昧であるこ

表1 各教科書が取り上げているレオナルド・ダ・ヴィンチに関する内容と作品等

教科書会社	内容	内容の詳細	取り上げた作品	教科書の学年	取り上げたページ数
日文	ルネサンス	ルネサンスとは 多彩な人物像 科学的な見方 最も有名な作品（モナ＝リザ）	モナ＝リザ 自画像 肩と腕の筋肉の研究	2・3年 （下）	2ページ
	美術文化の継承	文化財の修復	最後の晩餐		1ページ
光村	ルネサンス	絵画における傑作 万能の人 科学的な見方（遠近法、明暗法、解剖学） 場面紹介（最後の晩餐）	最後の晩餐 モナ＝リザ 肩と腕の筋肉の研究	2・3年	5ページ
開隆堂	ルネサンス	写実的で個性的な絵画や彫刻 ポーズや表情による人物表現（最後の晩餐） 遠近法	最後の晩餐	2・3年	1ページ

表2 各教科書が取り上げているパブロ・ピカソに関する内容と作品等

教科書会社	内容	内容の詳細	取り上げた作品	教科書の学年	取り上げたページ数
日文	戦争へのメッセージ	作品が生まれた背景 作品のテーマ 多様な表現の追求	ゲルニカ 死んだ子と母 ゲルニカのための習作	2・3年 (下)	2ページ
光村	戦争へのメッセージ	作品が生まれた背景 作品のテーマ 多様な表現の追求(青の時代、バラ色の時代、キュビズム)	ゲルニカ 海辺の母子像 サルタンバンクの一家 アヴィニョンの娘たち	2・3年	5ページ
開隆堂	新しい表現への挑戦	多様な表現の追求(青の時代、バラ色の時代、キュビズム)	自画像 旅人の家族 腕を組んですわるサルタンバンク	2・3年	2ページ
	戦争へのメッセージ	作品が生まれた背景 作品のテーマ	ゲルニカ ゲルニカのための習作		2ページ

とが特徴と言えよう。この境界線の違いこそが「価値観」を形づくり、人によって差を生むため、指導が難しくなると考えている。

### 1-3 美的価値観と道徳的価値観

次に取り上げたいことは、美的価値観と道徳的価値観についてである。

中学校学習指導要領美術科編には、「『B鑑賞』は、自分の見方や感じ方を大切にして、造形的なよさや美しさなどを感じ取り、表現の意図と工夫、美術の働きや美術文化などについて考えるなどして、見方や感じ方を深めるなどの鑑賞に関する資質・能力を育成する領域である。」<sup>6)</sup>と示されている。ここでは、見方や感じ方を深めるために「感じ取ること」と「考えること」が重要視されている。このことは、鑑賞における感覚的な側面と知的な側面があるということである。さらに、「鑑賞は単に知識や作品の定まった価値を学ぶだけの学習ではなく、自分の見方や感じ方を大切にし、知識なども活用しながら、様々な視点で思いを巡らせ、自分の中に新しい意味や価値をつくりだす学習である。」<sup>7)</sup>とも示されている。伝達可能な知識や価値、あるいは他者の見方や感じ方をよりどころとしながらも、自己の見方や感じ方を大切にすることが重要であるということである。つまり、「感じ取ること」の方が重要ということである。

一方、道徳的価値観については、学習指導要領には多くの「道徳的諸価値」という言葉は出てくるが、「価値観」という言葉はほとんど出てこない。用いられている箇所は『指導上の留意点』が多く、「価値観の押しつけに留意する」といった内容である<sup>8)</sup>。これは、教師自身の個人的な価値観が一人ひとりの異なる価値観の妨げにならないように留意することを意味している。道徳的諸価値と照らし合わせながら自分なりの見方・考え方を働かせることによって「価値観」を形成すべきだということを示している。

このようにとらえると、美術における価値観は、作品としてのよさ(価値)を主観的に判断するところに学びがあるということである。また、道徳における価値観は、自己の感じ方が道徳的諸価値の受け止め方を表すことになる。それは主観的な認識から客観的な認識に自己の価値観を移行させる行為ともとらえられる。

### 1-4 妥当性と問題性

次に、妥当性と問題性について述べる。妥当性とは、実態によくあてはまり、適切であるかどうかということである。ある程度の判断が適切であることを表している。そこには判断のもととなる基準が存在し、その範囲内であるかどうか重要である。それに対して問題性とはその範囲から外れた状態であるといえる。いずれもそこには境界線がある。ただし、違いがあるとすれば妥当性には中心があり、問題性には中心がないということである。妥当性は弓道の的のようなものであり、問題性は野球のストライクとボールの関係のようなものであると考える。ここには美術と道徳の教科の特性が表れる(図1)。

美術はそもそも表現の過程において同じものをつくることは禁じられている。多様な価値や個性という表現でよりよいものを追求するものである。その先に、作品や作家、表現方法やコンセプト等に対する価値が付き、受け継がれていく。したがって、同じような作品が評価されることはない。同じような作品が評価されるのは同一作家の統一した表現のみである。このように考えると美術においては中心のない価値を追求

していることが理解できる。つまり、問題がなく、的の中心に近いことが大切なのである。

しかし、それは表現者の見方である。鑑賞となれば、何を見せるか、どのような価値があるのかは明確に知り得ておきたい。例えば先述のピカソである。『ゲルニカ』(図2)という作品の価値を取り上げるには、歴史的背景と表現方法は欠かせない。それは作品のテーマに価値があるからである。戦争によって受けた怒りや悲しみを伝える作品であること、それをどのような表し方がよいかという追求過程は、学習の中でしっかりふれさせたいところである。具体的には、社会科で学んだ歴史的背景を子どもたちにも理解できるという前提で、無差別爆撃を受けたゲルニカという町をモチーフに、「戦争に対する怒りや悲しみをどのように作品で表現するか」を追求するということである。アプローチとしては『対話型鑑賞』に見られるように描かれているモチーフからテーマや表現方法に迫ることもできるし、テーマから表現方法へ、あるいは表現方法からテーマへ、といった『分析的鑑賞』といった迫り方も可能であろう。いずれにしても価値に迫る学習が重要なのである。

美術の学習は、ほとんどの場合が新たな価値との出会いから始まる。道徳のように日常的で社会通念的な価値とは異なる。ピカソが有名であることを教養として知っておく必要があるという認識やピカソという理解不能な作品の価値を理解させることに固執してしまうことがある。そのため、ピカソの認識が理解はできないが名前だけを知っているという状況に陥っているのである。

美術の鑑賞における学びのアプローチでは、価値の明確化であり、その価値に対して自分なりに妥当性を見出すことである。そうしなければ価値は見いだせないし、文化の伝承は叶わないと考えている。

一方、道徳の学びは、道徳的価値が日常的である場合が多いことから問題性を明確にすることが効果的であると考える。特に精神的な発達段階が上がれば、これまでの多様な経験をふまえて多面的・多角的にとらえることが可能となる。だからこそ、葛藤資料が効果的となる。葛藤資料は、複数の価値を選択する場合に判断に迷うものである。最終的には何を選択するかを問うようになるが、大切なことはそれぞれの価値に対して妥当性を問うか、問題性を問うかである。また、思春期を迎えた子どもたちは、あえて否定的な見解を示す。このときには問題性に目を向けることが大切だと考える。

例えば、ある中学校の二年生の授業参観を行った時のことについて述べる。題材は「小さなこと」で、話の概要は以下の通りである。

【節度・節制(生活習慣)】「小さなこと」 大佛次郎著 中学校道徳教科書2年、あかつき教育図書  
ある随筆家が新聞に掲載したことに関わる話である。どのような状況であっても、便所の草履の向きをそろえているという紹介をする。これは他人に知られず、他人のためになることなのでやってきたことだという。死んで閻魔様の前に出ても、「わたしはつまらぬ人間で、何も他人の役に立たないで生きてきましたが、どこへ行っても便所の草履だけは揃えて出て参りました」と言うつもりである。それを読んだ知人が「あれは誰のことですか。」と声をかけられ、自分であることを伝える。どうやら自分だと察しがついているようだと感じる。数年たってこのことを別の随筆に書いた。「小さい自分のしつけ」を伝えた内容である。

導入として、よい生活習慣について意見を出し合った。その後「小さいことを続けさせているものは何だろう」を中心発問として、個人で考え、班で協議をした。キーワードとして「思いやり」「良心」「使命感」「達成感」「安心感」などがあがった。「思いやり」といった他者のために行う行為でありながら、

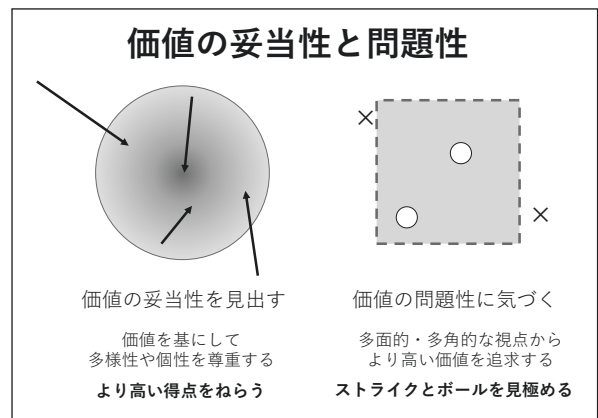


図1 価値の妥当性と問題性



図2 パブロ・ピカソ作『ゲルニカ』1937年  
(349.3 x 776.6cm レイナ・ソフィア美術センター)

「良心」「使命感」「達成感」「安心感」といった自分自身の気持ちに目を向けている点が中学生らしさである。その中に「自己満足」という意見が出た。これも中学生ならではの反抗的・否定的な見解のように思える。

ここが価値観の分かれ目である。言葉自体には問題があるように思われるが、とらえようによっては問題がないようにも認識できる。例えば、閻魔様の前で「なぜ便所の草履を揃え続けるのか」と問われたら、筆者の性格をふまえると、「人のために」と答えず「自己満足」と言うかもしれないのである。実際にこのやりとりは行われなかったが、問い方を工夫することで、問題性は変わったかもしれないし、自己満足と答えた生徒を道徳的価値に近づけることができたかもしれない。しかし、そもそもの問いは「小さいことを続けさせているものは何だろう」である。この答えとしては、「問題はある」と判断する生徒は多いだろう。このように考えると、道徳的諸価値に縛られすぎないためにも多様な価値観の問題性に目を向けることは効果的だと考える。それは、多面的・多角的にとらえるということを実行する教師の解釈力にもなる。

## 2. 価値に迫り、価値と向き合う

これまでの経験から思うことは、道徳科の教材の中にも美術科の鑑賞の教材の中にもよい教材というものがある。それは、教材の力と言われてきたが、そのことにまずはふれたい。

### 2-1 道徳科の教材から見えてくること

授業は、教師の意図や発問によって左右されるところは大きい。総じて考えやすいものに共通する点がある。それは「比較」である。道徳科でいえば、対立的な意見が出やすいものであり、その行き着く先に大切な道徳的価値を見出すことができるものがある。例として『二通の手紙』を取り上げる。

本教材の内容項目は「遵法精神、公德心」と示されている。生徒にどのようなことについて考えたいかを問うと多くの場合「なぜ元さんは、来園客から感謝されたのに退職させられなければならないのか」ということに焦点化される。意見を伝え合えば伝え合うほど上司からの懲戒処分の在り方が論点になる。ここで重要なことは、「遵法精神、公德心」である。道徳科では、読み物資料の中に多くの登場人物が出てくることが多い。誰の立場に立つかによって多面的・多角的な見方もできる。一方でその判断を誤ると学びが拡散し、自分の価値観が分からなくなってしまいうことも多い。融通を利かせて幼い姉弟を園にいれ感謝された「思いやり」と規則によって退職した「遵法精神」の2つの価値観の問題性を問う場合に起きる。

#### 『二通の手紙』—あらすじ—

動物園の入園係をしていた元さん。勤勉な働きぶりも評価され、定年後も動物園で臨時職員として働くことになっていた。ある日、入園終了時刻が過ぎてから幼い姉弟がやってきた。入園時刻を過ぎていること、さらに規則では保護者と同伴でないと入園できないことになっているが、元さんは事情を察して二人を入園させてしまう。ところが、閉園時刻を過ぎても姉弟は戻ってこない。園内の職員総出で二人の捜索が始まった。二人は遊んでいるところを無事に発見され、事なきを得た。数日後、姉弟の母親から謝罪と非常に感謝している旨の手紙が届く。一方、上司からは今回の件を受けて懲戒処分（停職）の文書を受け取る。元さんは「この年になって初めて考えさせられることばかりです。この二通の手紙のおかげですよ。また、新たな出発ができそうです。本当にお世話になりました」と語り、退職した<sup>9)</sup>。

そこで、この教材においては最終的に「元さんの判断」を問うことを提案したい。元さんは二通の手紙から学び、退職することを決断したのである。そして、元さんは決まりを守ることを最終的に選んだということである。元さん自身の生き方や潔さを考えたときに、「遵法精神、公德心」に目が向くであろう。決まりは決まりとして守らなければならないことを心情的に許せない生徒も想像はできる。しかし、元さんが「退職する」という判断は、誰にも変えられないのである。もし、自分自身がそのような立場に立ったとき、どのような判断をするのか、考えさせたいものである。

しかし、道徳科の教材には『二通の手紙』と似て非なる『ディズニーランドのお子様ランチ』のような資料もある。この話は、扱う内容項目が異なる教材である。

### 『ディズニーランドのお子様ランチ』—あらすじ—

ある若夫婦が東京ディズニーランドのレストランで、お子様ランチを注文したのです。注文を受けた店員は「お子様ランチは規則で9歳以下の方しか注文できない」と伝えます。落胆した夫婦に店員は理由を聞きます。すると娘の一周忌の記念に食べようと思い、注文したことを告げます。

店員は家族席に案内し、子供用のイスを用意し、三人分のお子様ランチを準備したのです。

そして、最後に店員の行為は規則違反ですが、どうすればお客様が喜んでくれるのか、ありがたいといってもらえるのか、それを第一に考えていますと締めくくります。

この教材に対して、坂本哲彦は自身の「道徳・総合の授業づくり」の中で「レストランのウェイター（キャスト）の行動に対して夫婦の心情に対して、思いやりをもって生活することのよさ・すばらしさを臨機応変に（その場の状況に応じて）相手の願いを叶えること」の素晴らしさを考えさせることができると紹介している<sup>10)</sup>。まさに『二通の手紙』の「感謝」と「法」の二つの価値で「法」を優先させたものとは逆の設定である。

しかし、『二通の手紙』と『ディズニーランドのお子様ランチ』の後味の違いは大きい。受け止め方としては、いわゆるよい話かどうかということである。道徳的あることの前提に「よい行いを支える心情」があるからである。社会性と多様性を問われる現在において、道徳的価値をしっかりと考えさせ、各自の価値観を明確にさせたいものである。

## 2-2 美術科の教材から見えてくること

これまで水墨画について興味をもち、教材化してきた。その中で水墨画のよさや美しさとは何か、それを伝えるためのよい教材はどのようなものがあるのか、を考えてきた。美術における価値が曖昧であるがために難しい面は多いが、現時点での結論から述べたい。

水墨画のよさや美しさを一言で表現するならば「簡略化されたモノクロームの巧みな表現」である。本来、色彩豊かな日本の自然において、それを白黒で表現すること自体「省略」が伴う。また、筆と墨・水、紙といった限られた素材で表現され、そこには巧みな「技」も伴う。これらのことを雪舟作『四季山水図巻』(図3)を用いて説明したい。

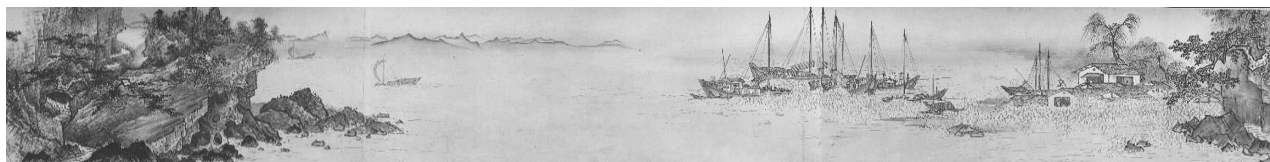


図3 雪舟等楊作 『四季山水図巻』(部分) 1486年 40.8cm×1602.3cm (毛利博物館蔵)

本作品は、雪舟が四季を描いた作品であることは、作品名から分かる。実際に16メートルもある作品なので、至る所に四季を感じさせるモチーフが描かれている。大まかに四季が分かると色味を感じるようになる。実際に本物は少し着色が施されており、それもヒントになる。また、ぼかしを使って場面をつないだり、奥行きや広がりを表したりしており、余白が時間や空間を暗示させる。これは全て「省略」により生まれる想像の世界である。俳句や短歌に似ている。季語が入り、言葉と言葉をつなぎ、句切れで余白が生まれる。自然や四季を身近に感じ、それを簡略化した表現で味わいなおす風情が日本の水墨画の特徴といえる。

ところが、水墨画のよさや美しさの解説はあまり見られない。よさや美しさでは視点は定まらない。前述したが、美術の価値の曖昧さは、価値観の曖昧さにもつながる。したがって問題性は抱きにくい。「省略されているもの」に焦点を当て、自分の判断で妥当性を確かめさせることが重要なのである。

ここでは、『四季山水図巻』を取り上げたが、水墨画のよさや美しさは作品によっても異なる。水墨画の多くは、禅画やお抱え絵師として受け継がれてきたものが多い。例えば、宮本二天(武蔵)の作品には、剣の太刀さばきと同じように運筆の鋭さを作品に見ることができる。それは禅の思想にもつながり、お抱え絵師の作品であれば、狩野派の作品から技や様式美のことを伝えることもできる。辻唯雄は著書『日本美術の見方』で「自然観」「装飾性」「遊戯性」を示している。このように様々な解釈ができる点が美術の曖昧さであり、価値が定まらないところである。しかしそれは、日本美術に限ったことではない。美術の表現が「同じものをつくらない」ということによるものであることは、前述の通りであり、西洋の作品においても

同様のことが言える。

そこで西洋絵画からレオナルド・ダ・ヴィンチ作『最後の晩餐』(図4)を紹介する。前に紹介した雪舟作『四季山水図巻』とほぼ同じ年に作成された作品だからである。比較することで文化の違いや作品のよさや美しさが大きく異なることがわかる。前述の表1で示したとおり、本作品は「ルネサンス」「科学的な見方」「本作品の場面(内容)」を主に取り上げている。人間らしさを含め、リアリティの追求を科学的に作品に取り入れた功績が紹介されているということである。科学的とは「遠近法」であり「明暗法」といったリアルに表現するための方程式のようなもの、という意味である。



図4 レオナルド・ダ・ヴィンチ作 『最後の晩餐』  
(1497年 420×910cm サンタ・マリア・デッレ・  
グラツィエ修道院)

しかし、『四季山水図巻』と『最後の晩餐』では、とらえ方が大きく異なる。それは、絵画に対する認識の違いである。絵は本物そっくりに描かれているとわかりやすいという狭い理解が、水墨画に対する理解を遮っているということである。そうであれば、なおさら水墨画に対する明確な価値を示す必要がある。

### 3. 深い学びを求めて

ここまで価値と価値観、妥当性と問題性について美術の鑑賞と道德の共通点とそれぞれの特性について述べてきた。ここでは価値観の形成に向けた深い学びの手だてを提案したい。

#### 3-1 『同じ』と『違う』を繰り返すことの大切さ～価値観の輪郭を描く～

ここでは、道德で考えるきっかけとなる言葉のニュアンスを『リフレーミング』をもとに考える。リフレーミングは、言葉の言い換えであり、肯定的に物事をとらえなおす際に用いられる手法として紹介されることが多い。例えば「優柔不断」を「思慮深い」に、「心配性」を「慎重」に、「頑固」を「芯が強い」と言い換える。しかし、ここには微妙な違いがあることを誰もが感じる。否定的か肯定的かということ自体が、問題性を問うているということである。しかし、様々な状況によってこの問題性は変わってくる。道德的諸価値は状況によって左右されやすいということである。だからこそ道德の授業において同じ価値項目について繰り返し学ぶことに意味がある。様々な状況においてどのように感じ、考えることが価値観の形成に結びつくのである。

そのために道德的諸価値を基に意見の違いを少しずつ明確にしたい。それは「違う」ことを前提としている。違いこそが問題性であり、輪郭をはっきりさせるからである。違いにも様々であるのでちょっとした違いが重要である(図5)。こうしてできあがる輪郭線が、今後の価値判断に役立つであろう。これこそが自分自身の道德的価値観になる。

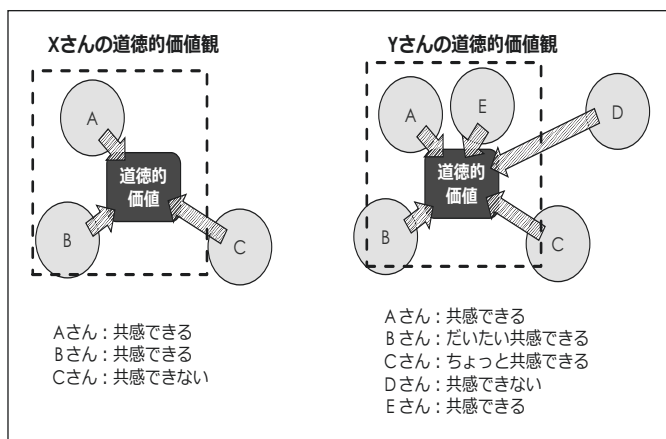


図5 道德的価値観の輪郭

また美術における価値観の輪郭については、前述した雪舟作『四季山水図巻』(図6)を用いる。この部分は冬の場面である。その根拠を問えば、「山が白く表現されている」「雪が積もっていることを表現するために山を白く表現している」「空



図6 雪舟作『四季山水図巻』(部分)

が曇っている」「雪雲、冬の空は薄暗い、重たい空」といった意見が出る。これは事実かどうかははっきりしないが、表現されている形や色からすれば、多くの場合そのように受け止められる。これが妥当性である。しかし、「何が省略されているか」と問えば、様々な憶測が広がる。「音のない静けさ」や「寒さ」など様々である。ここに美術における価値観の違いが表れやすい。これは極めて感覚的なものといえる。しかし、一番納得のいく「同じ」こそが求めているものになる。一番自分に合致する価値観を見出そうとする傾向が強いということである(図7)。

事象に対してそれが正しいことか判断する場合、そこに問題性と妥当性を感じることは決して不自然なことではない。だからこそ多くの意見を出し合い、「同じ」と「違う」を繰り返しながら自分なりの価値観の輪郭をはっきりさせることが重要であると考える。

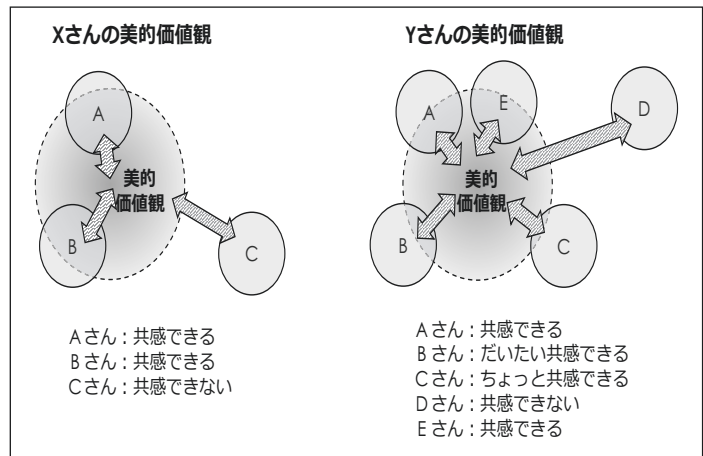


図7 美的価値観の輪郭

### 3-2 価値理解、他者理解、自己理解

社会には多様な価値が存在する。そこには民族性や地域性、宗教性を土台にして人と人が共生する上で必要な考え方の基本となるものである。それは文化の独自性としてこれまで重要視されてきた。その上で、グローバル化が進み、多様性が認められるようになり、個人としての価値観が重視されるようになってきた。だからこそ、道德教育でいうところの「道德的諸価値についての理解を基に」することは欠かせない。価値理解を的確に捉えることで、他者の考えや自分の考えは生まれるからである。しかし、多様性の理解が進むことで価値を理解すること自体が難しくなっている。それは、美術の世界と同じではないだろうか。美術における価値は、歴史的に残り、受け継がれてきた理由を明確にしにくい。社会全体で築き上げた道德とは、価値形成や価値理解の段階で美術とは大きく異なる。他者や自己の感じ方を基に価値を判断しているということである。

基準となる価値が明確な場合は、その基準と照らし合わせながら、多面的・多角的に自己の価値観を形作ることは効果的であろう。また基準となる価値がとらえにくい場合は、より多くの多面的・多角的なとらえ方を基に価値をとらえていくことが効果的であろう。そのように考えると、価値理解、他者理解、自己理解は有機的に結びつき、互いに関連し合って形成されるものであると考える。このことは、よりよい社会を形成する上でとても重要なことであり、教育において最も重視すべきことのように考えている。多様性が重視され、個人の判断に委ねられることが多くなってきていることを考えると、なおさらその重要性を感じずにはいられない。

### おわりに

これまで価値と価値観について述べてきた。美術科の鑑賞におけるダ・ヴィンチとピカソ、ダ・ヴィンチと雪舟も比較することで共通点と相違点が明確になる。時代、表現技法、表現内容、作家の生き方など、様々な基準で作品を鑑賞したときに見えてくるものがある。曖昧なものに対して焦点が定まるようなものである。特に美術においては、ひとつひとつの作品が異なるために「違い」を表現しているところの一つの特徴がある。そのように考えると鑑賞者は「同じ」感覚を共有しようとする。共通点を見出すことに他者との関わりを求めるといった学びがあると考えている。それは自分の中に中心となる価値基準を求めるということであり、これが美術における価値観の形成の特徴である。

また、道德では『二通の手紙』と『ディズニーランドのお子様ランチ』を比較した。同じ価値項目を葛藤させながら、最終的には読み物資料の主人公が判断し、選択した行動が価値項目となっていた。登場人物の判断に対する判定こそが、自分の考え方であり、価値観となる。多様な考え方にふれることで、価値観の輪郭をはっきりと描けるようになっていく。これこそが道德の学びの重要なところである。



そのように見ると、美術と道徳の関係を比較するだけで価値と価値観の共通点と相違点も明確になる。価値はこれから大きく変わることはないだろうが、自分の価値観と照らし合わせて本当に価値を見いだせたか、によって価値の重みが決まっていくのではないだろうか。アプローチは異なっても行き着く先にある『自分の中に何が残るか』という価値観が重要である。

道徳も美術も価値を扱う教科である。美術においては価値を見出す過程において一番自分にとって納得のいく価値観を形成しようとする。道徳は価値を確かめる過程において様々な事象が適切かどうかを自己の価値観を用いて判断し、その結果として価値観は形成される。多様性が認められ、個性が重要視される時代だからこそ、それぞれの教科の特性をしっかりと見極めながら、今後も深い学びを追求したい。

## 参考文献

- 高宮正貴：『価値観を広げる道徳授業づくりー教材の価値分析で発問力を高めるー』，北大路書房，2020。  
文部科学省：『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編』，教育出版，2018。  
松本美奈・貝塚茂樹・西野真由美・合田哲雄：『特別の教科 道徳Q&A』，ミネルヴァ書房，2016。  
中村清：『道徳教育論ー価値観多様化時代の道徳教育ー』，東洋館出版，2005。  
原聰：『日本人の価値観～異文化理解の基礎を築く～』，かまくら春秋社，2013。  
辻唯雄：『日本美術の見方』，岩波書店，1992。  
『美術2・3下〔令和3年度〕』（文部科学省検定済教科書 中学校美術科用），日本文教出版，2020。  
『美術2・3〔令和3年度〕』（中学校美術科 文部科学省検定済教科書），光村図書出版，2020。  
『美術2・3〔令和3年度〕』（文部科学省検定済教科書 中学校美術科用），開隆堂，2020。  
『令和3年度版中学校道徳教科書2年』，あかつき教育図書，2020。

## 引用文献

- 1)、2) 文部科学省：中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 美術編，日本文教出版会社，p.124，2018。
- 3)、4) 例解新国語辞典第八版，三省堂，p.216，2012。
- 5) 紺野祐、盛下真優子：東北学院大学教育学科論集 第3号 『道徳教育における「価値」と「価値観」について (1)ー「価値」「価値観」概念の混乱を解くー』，pp.22-23，2021。
- 6) 文部科学省：中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 美術編，日本文教出版会社，p.28，2018。
- 7) 文部科学省：中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 美術編，日本文教出版会社，p.29，2018。
- 8) 文部科学省：中学校学習指導要領（平成29年告示）解説特別の教科 道徳編，教育出版，p.82、91，2018。
- 9) 明治図書 教育zine 明日の教育を創る人へのウェブマガジン 道徳授業づくり実践講座 (5) 定番教材「二通の手紙」を用いた道徳の授業づくり 立命館大学大学院 教授 荒木寿友 2018掲載 <https://www.meijitoshu.co.jp/sp/eduzine/q4um/?id=20180926> (accessed 2022.12.12)
- 10) HP先生のための教育事典 EDUPEDIA 「ディズニーランドのお子様ランチ」で人間愛の精神を培う (坂本哲彦先生) <https://edupedia.jp/archives/17665> (accessed 2022.12.12)